

機関番号：12201

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20730421

研究課題名（和文）小中学生のいじめ防止に向けた妬み感情とシャードンフロイデの喚起メカニズムの解明

研究課題名（英文）Preventing Bullying by Elementary and Junior High School students through Understanding Emotion-Evoking Mechanisms Associated with Schadenfreude and Envy

研究代表者

沢田 匡人（SAWADA MASATO）

宇都宮大学・教育学部・准教授

研究者番号：40383450

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、他者の幸福に対するネガティブな感情である妬みと、他者の不幸に対するポジティブな感情であるシャードンフロイデに焦点を当て、それらの喚起メカニズムの解明を通じて、学校におけるいじめの予防と介入に役立つ成果を得ることであった。こうした感情といじめに対する態度の関係を明らかにするために、主に小中学生を対象とした質問紙調査を実施した結果、いじめとは直接関係ない場面でシャードンフロイデを感じやすい者は、いじめを容認しやすいことがわかった。また、過去約1年以内にいじめに加担した経験が多い中学生が感じる妬みには、加担経験の少ない者が抱くそれと比べて、いじめ排斥態度を高める効果があることも示された。

研究成果の概要（英文）： The purpose of this study was to gain insights to prevent and to possible intervene in school bullying, through understanding emotion-evoking mechanisms. The study focused on envy, which is a negative emotion aroused by another's good fortune, and on *schadenfreude*, which is a positive emotion aroused in response to another's misfortune. Participants in this study were elementary and junior high school students for the most part. A questionnaire survey was conducted on several occasions in order to clarify the relationships between emotions and attitudes that individuals have toward bullying. Results suggest that students who are more likely to feel *schadenfreude* in situations not related to bullying are more likely to accept bullying. In addition, the envy felt by junior high school students that have engaged in bullying a number of times in the past one year is more likely to enhance attitudes for rejecting bullying, compared to those students that have engaged in less bullying in the past one year.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：シャードンフロイデ、妬み感情、いじめ加担経験、いじめ容認態度、社会的望ま

1. 研究開始当初の背景

心理学的アプローチによるこれまでの感情研究では、喜怒哀楽に代表される基本感情 (e.g., Izard, 1994 ; Plutchik, 1980)、あるいは「恥」や「罪悪感」といった社会的に望ましくない行動を抑制する道徳的な感情 (e.g., Hoffman, 1984 ; Tangney, 1992) に関心が寄せられ、多くの知見が蓄積されてきた。しかし、人間の感情を理解するためには、こうした感情だけではなく、一般に「悪意」と呼び称されている陰湿で忌避されがちな感情のメカニズムの解明も不可欠だろう。

本研究では“他人の不幸は蜜の味”や“様を見ろ”に相当する感情経験である「シャーデンフロイデ (schadenfreude)」に着目する。シャーデンフロイデに関する研究は、国内外を問わず未開拓の分野であることを鑑みれば、悪意に関する実証的な研究を進展させているという意味で意義がある。それと同時に、「いじめ」のようなシャーデンフロイデに纏る諸問題の理解や防止に繋がるという点で、教育的側面からの成果提供も期待される。

2. 研究の目的

本研究の目的は、幅広い年齢層を対象に、他者の不幸を喜ぶ感情である「シャーデンフロイデ」の喚起メカニズムを明らかにし、いじめの予防や改善に繋がる研究成果を得ることにある。

近年、自殺まで引き起こすような子ども同士のいじめ問題が大きく取り上げられ、その背景の一つに、自分以外の子どもに対する「妬み感情」が介在しているとの指摘は多い (たとえば、土居・渡部, 1995)。しかし、妬み感情と問題行動の関係を検討した実証的研究は、沢田 (2006) を除けば、本邦では皆無に等しい状況にある。また、いじめと感情の問題を明らかにするにあたり、いじめる側だけではなく、いじめを黙認する傍観者の存在も無視できない。いじめを制止できないもどかしさを苦しむ者もいれば、いじめをむしろ楽しんで見ている者もいるだろう。

そこで本研究では、いじめの開始や維持に重要な役割を担う感情として、他者の幸福に対するネガティブな感情である妬みと、他者の不幸に対するポジティブな感情であるシャーデンフロイデに焦点を当てた。そして、両者の関係を明らかにしながら、いじめの開始と維持にこうした感情がどのような影響を及ぼすかを検討することを主たる目的とした。

3. 研究の方法

小学生から大学生を対象とした質問紙調査を用いた。妬み感情の測定に際しては、先行研究 (e.g., Smith et al., 1996) を参考にしながら、妬みを感じやすい要因が操作された仮想場面を用いた。シャーデンフロイデの測定に関しても同様であった。その内容は、架空の人物が登場し、いくつかのエピソードを交えながら最終的に失敗するというもので、調査対象者の性別などを考慮して複数のバージョンを用意する。そして、当該人物に対する感情の評定させることによって、より現実場面に近い感情の測定を期した。

また、「いじめ容認態度」など、いじめそのものに対する意見を問う場合には、先行研究 (神藤・齋藤, 2001) にならい「いじめ」という言葉をそのまま用いた。しかし、調査参加者が過去いじめに関わったか否かを問う項目については、いじめという言葉を用いて直接は尋ねることなく、いじめに関わった経験を問う尺度 (いじめ加担経験尺度) を独自に開発して調査に臨んだ。

なお、こうした一連の調査全体を通じてネガティブな質問項目が多くを占めていた。そのため、とりわけ小中学生を対象とする調査では、社会的に望ましい反応に敏感に回答する傾向が混入することをあらかじめ見越して、解析の精度を高めるために、他の尺度と合わせて「社会的望ましき」についても回答を求める質問紙の構成とした。

4. 研究成果

(1) 平成 20 年度

中学生 334 名を対象とした質問紙調査を実施した。質問紙は、いじめを容認 (あるいは排斥) する態度、過去にいじめに加担した経験、いじめとは関連のない仮想場面で喚起される妬みとシャーデンフロイデを測定する尺度から構成されていた。社会的望ましきによる影響を取り除いた解析を通じて、いじめに対する態度に直接関連しているのは、妬みではなくシャーデンフロイデであることが明らかにされた。むしろ、シャーデンフロイデが高い場合に限り、妬みには排斥態度を高める効果がある可能性も示唆された。

また、シャーデンフロイデがいじめ容認を高める傾向は、232 名の小学生においても同様に確認された。ただし、中学生の結果とは異なり、小学校高学年では、あらかじめ妬みが抱かれていた場合、シャーデンフロイデがいじめ排斥態度を抑制することがわかった。

一方、大学生 225 名に対するシャーデンフロイデの喚起メカニズムに関する調査では、女性よりも男性の方がシャーデンフロイデ

を経験しやすいこと、自尊感情には妬みを抑制する働きがあること、妬みがシャードンフロイデを促進すること、女性では自己愛の高さが直接シャードンフロイデの喚起に繋がりがやすいことなどが示された。

(2) 平成 21 年度

小中学生566名を対象とした調査を通じて、いじめを容認する態度を促進するのは、妬みではなくシャードンフロイデであることが示唆された。また、いじめ加担経験が多い中学生に限り、妬みは排斥態度を促進する効果を有していた(図1)。この結果は、いじめに間接的に参加した経験のある者が抱く妬みには、いじめに対する抵抗感を高める働きがあることを示すものではないかと推察した。

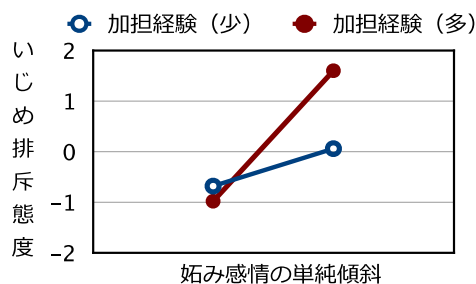


図1 いじめ排斥に対する妬みの促進効果

さらに、いじめやシャードンフロイデに関連する概念として「復讐心」を新たに取り上げて、大学生543名を対象とした調査も行った。まず、復讐心尺度(Stuckless & Goranson, 1992)の日本語版を作成して、妥当性と信頼性を確認した。その上で、特性としての復讐心がシャードンフロイデに及ぼす影響を探索的に検討した結果、男女ともに復讐心がシャードンフロイデを促進していたが、復讐心が影響する妬み感情の喚起プロセスは、男女で異質なものであることも示唆された。すなわち、男性は、復讐したいという気持ちの高ぶりが他者の不幸を求めることに直結しやすいのに対して、女性の場合は、復讐心は妬みの喚起にも分散するため、必ずしも他者の不幸を望むことだけに繋がるものではなかった。

(2) 平成 22 年度

前年度に引き続き、いじめの加害を見過ごしてしまう心理的なメカニズムを明らかにする基礎的な知見を得るため、大学生439名を対象とした調査も実施した。この調査では、仮想的な評決場面における量刑判断に及ぼす復讐心の働きに着目しながら、共感性や許しについても同時に測定された。解析の結果、復讐心は男性の方が高く、これは従来の知見と整合するものであった。また、復讐心が強い者は、自分が抱いた感情に従って厳しい量刑を判断しても良いと考える傾向がみられたこ

とから、裁判員の復讐心が量刑を判断する過程で一定の役割を持つ可能性が示唆された。こうした知見は、実際の評決だけではなく、たとえば、制裁としていじめが実行される場面を理解する一助ともなりえるだろう。

一方、学校適応と妬みの対処方略の選択スタイルとの関連について検討した研究では、学校生活満足度の時系列的な変化に応じて、中学生403名を類型化した。その結果、学校生活満足度が約3ヵ月の間で適応的に変動した群(第1クラスターと第3クラスター)や、不適応に陥った群(第5クラスター)などが見出された(図2)。続いて、特性としての妬みややすさと対処方略の選択プロセスを検討したところ、第1クラスター(適応的に変化した群)に属する生徒は自分に何が足りないかに敏感であると建設的な行動をとりやすいが、第5クラスター(不適応に変化した群)の生徒は、回避的な方略のみが抑制されやすいことなどがわかった。こうした結果から、自分の状態を省みた上で自らが抱いた妬み感情に対処することが、結果として適応的な変化に繋がるのではないかと解釈した。

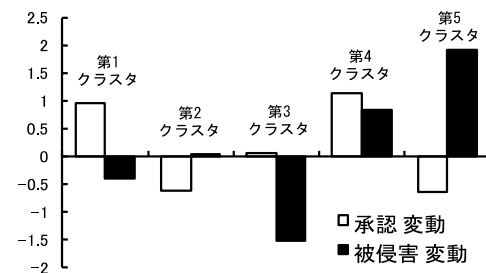


図2 学校適応に基づくクラスター分析結果

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 沢田匡人、シャードンフロイデの喚起に及ぼす妬み感情と特性要因の影響：罪悪感、自尊感情、自己愛に着目して、感情心理学研究、査読有、16号、2008、36-48

[学会発表] (計7件)

- ① 葉山大地、沢田匡人、学校適応の変動を調整変数とした妬み対処プロセスの解明(1): 学校生活満足度の時系列的な変動パターンの分類、日本パーソナリティ心理学会第19回大会、2010年10月11日、慶応義塾大学
- ② 沢田匡人、葉山大地、学校適応の変動を調整変数とした妬み対処プロセスの解明(2): 特性妬みから対処方略の選択に至る因

果モデルの検討、日本パーソナリティ心理学会第 19 回大会、2010 年 10 月 11 日、慶応義塾大学

- ③ 沢田匡人、葉山大地、裁判員としての量刑判断に及ぼす復讐心の影響、日本教育心理学会第 52 回総会、2010 年 8 月 28 日、早稲田大学
- ④ 沢田匡人、葉山大地、シャーマンフロイドの喚起における復讐心と特性怒りの役割、日本パーソナリティ心理学会第 18 回大会、2009 年 11 月 29 日、川崎医療福祉大学
- ⑤ 沢田匡人、小中学生のいじめに対する態度とシャーマンフロイド、日本心理学会第 73 回大会、2009 年 8 月 27 日、立命館大学
- ⑥ 沢田匡人、小学生のいじめに対する態度とシャーマンフロイド、日本発達心理学会第 20 回大会、2009 年 3 月 23 日、日本女子大学
- ⑦ 沢田匡人、中学生のいじめに対する態度とシャーマンフロイド、日本心理学会第 72 回大会、2008 年 9 月 19 日、北海道大学

6. 研究組織

(1)研究代表者

沢田 匡人 (SAWADA MASATO)

宇都宮大学・教育学部・准教授

研究者番号：40383450